

# 過去への前進という未来への逆進——労働賃金と所有の批判哲学

松本潤一郎

---

**Abstract:** *In search of an exit from capitalist society as loop structure, Karl Marx went back to pre-capitalist economic formations, and found the ancient communities in Russia or the primitive forms of common property in Europe; he dug the time-capsule from historical strata. To go back to the future (post-capitalist formations), he drove the time-machine to go forward to the past (pre-capitalist formations). Pierre Klossowski also encountered the same agenda on the investigation of the anachronistic emergence of perverse phenomena in the modern industrial society (like a warp). And he invented the strange concept (called Living Currency) as substitute for money as salary (which cannot translate 'justly' the power of labor). In this sense, he inherited Marx's thought in the vertiginous movement of 'back to the future' as 'forward to the past'. In this spiral process (as eternal return), the future becomes the past and vice versa. He called the process simulacrum.*

**Keywords:** *Living Currency, Perversion, Pre-Capitalist Economic Formations, Simulacrum*

---

人びとは未提起の問いへの答えを手に行っている。彼らには壁を乗り越える力がある。問いは未だ問われていない。問いには問い相応の言葉や概念が求められるからだ。民主制、自由、生産力など、諸々の出来事に名称を与えるために現在使われている語は意味を失った。新たな概念を手に入れば、問いはすぐさま提起されるだろう。歴史はまさしくそうした問題提起の過程に係わるのだから。——ジョン・バージャー<sup>1</sup>

## 1. タイム・カプセルとその解凍

1881年、周知のようにカール・マルクス（1818-1883）は、ロシアの職業的革命家ヴェーラ・イヴァノヴナ・ザスーリチ（1849-1919）に宛てて、ロシアにおける資本主義の発展に関する手紙を送っている（3月8日付）。その頃、友人たちとともに「労働解放団」という名の政治組織を創設していたザスーリチは、『資本論——経済学批判』第1巻（1867）をフランス語版（1875）で読み、そこでマルクスが論じている資本主義の傾向的法則は、はたしてロシアにおいても該当するのだろうかという疑問を抱き、彼にその旨を問う手紙を、書き送った。彼女の問いかけへのマルクスによる応答が、いわゆる「ザスーリチ書簡」である。フランス語で書かれた同書簡には、三つの草稿があることも知られている<sup>2</sup>。いずれの草稿にも見てとれるの

---

1 John Berger, 'Afterword,' in Andrey Platonov, *Soul*, New York: New York Review Books, 2007, 317.

2 カール・マルクス「ヴェ・イ・ザスーリチへの手紙」および「[ヴェ・イ・ザスーリチの手紙への回答の下書き] [第一〜三草稿]」『マルクス＝エンゲルス全集（1875-1883）』第19巻、大月書店、1968年所収。以下、同書の引用・参照は「19」と略記し該当頁数と併せて本文内に表記。

は——ザスーリチに送った手紙の中では明記されていないが——、当時のロシアにおいては、資本主義的生産と農村共同体とが共存しているという論点である。

同書簡で問われている主題を説明しておく。『資本論』第1巻でマルクスは、資本主義的生産様式が成り立つ基本的条件の一つとして、生産者と生産手段の分離を挙げている。ここで述べられている生産者とは、端的には、みずからの土地を所有し、その土地を耕作して農作物を収穫して生きる農民であり、そして農民を資本主義的生産の担い手、すなわち賃労働者とするためには、農民から土地を含めたその生活手段を収奪し、労働力以外なにも所有していないという状態に追いつめることが必要とされる。そのような状態に追い込まれた人間には、資本制の下でみずからの労働力を商品として、資本家に売るよりほか、生きるすべがないからである。(労働者から労働力を購買した資本家は、労働者にみずからの生産手段を提供し、これを使用させて商品を生産させ、生産された商品を売ることによって、利潤を獲得する。これが資本主義的生産の体制であり、この体制を作動させるための前提条件として、生産者と生産手段の分離が必要とされる。)

マルクスは実際にザスーリチに送った手紙の中で、この分離が「根底的に遂行されたのは、まだイギリスにおいてだけである。……だが、西ヨーロッパの他のすべての国も、これと同一の運動を経過する」と述べた箇所をフランス語版『資本論』から引いたうえで、「だから、この運動の「歴史的宿命性」は、西ヨーロッパ諸国に明示的に限定されているのです」と述べ、その理由として、再びフランス語版『資本論』から「自己労働にもとづく私的所有……は、やがて、他人の労働の搾取にもとづく、賃金制度にもとづく資本主義的私的所有によってとって代わられるであろう」と述べた箇所を引き、「こういうしだいで、この西ヨーロッパの運動においては、私的所有の一つの形態から私的所有の他の一つの形態への転化が問題となっているのです。これに反して、ロシアの農民にあっては、彼らの共同所有を私的所有に転化させるということが問題なのでしょう」とザスーリチの問いを整理している(19:238頁、傍点原文)。

生産者から生産手段を分離させる場合にも、すでに私的所有が形成されている状態でこれを遂行するのか、あるいは共同所有の状態において遂行するのかという点で差異が生じる。生産手段を奪われた農民は、資本制において再び私的所有の形態を——その内実は深く変質させられているにせよ——与えられる。だがロシアには農村共同体が依然、存立しており、この点、すでに私的所有形態が浸透していた西ヨーロッパ農民の場合とは事情が異なる。第二草稿ではロシアにおける「共同所有」の具体的説明として、土地が農民たちによって共同で所有されるとともに、耕作は農民各々の計算に基づいて行われ、その収穫物は耕作者各々によって所有されるという「内的な二重性」をもつとされる(19:402頁)。

ロシアの場合と完全に同じではないにせよ、西ヨーロッパにも共同所有はあったが、これは「たえまない外戦と内乱とのなかで死滅した」と第一草稿では推測されている(19:389頁)。他方、第二草稿では、ロシアは「近代の歴史的環境のうちに存在し、〔……〕資本主義的生産の支配している世界市場に結びつけられている」と同時に、共同所有が広大に全国規模で維持されており、したがってその原初形態を破壊されることなく、その「全系列の発展をそれ自身で経過してきた原古的な型の最近代的な形態」としての共産主義的所有の形態へと発展・転化させる可能性があるという(19:401頁)。同草稿では、共同体には、地層の堆積が地球の歴史を一覧させるように、その構成の全経緯を折り込んだまま現存するケースがありうるという旨の文言も読まれる。「われわれの地球の原古期〔古世代〕すなわち第一紀の地層は、それ自体、つぎつぎに累積してきた、さまざまな時代に属する一連の単層をふくんでいる。それと同じく、社会の原古的構成は、前進的諸時期を画する(相互の一つの上昇系列を構成する)、さまざまな型の一連をわれわれに啓示している。ロシアの農村共同体は、この連鎖の最も新しい方に属

している」(19: 401-402 頁、〈 〉内はマルクスによる草稿への再書き込み、ルビおよび〔 〕内は訳者)。ここでマルクスは歴史を複数の層の堆積という比喻で捉えようとしている。歴史は単線的に進行せず、諸要素の配置の変更というかたちで、新しいものと古いもののあいだの関係がそのつど規定しなおされる過程である<sup>3</sup>。ロシアでは「原古的な」共同体構成が近代の只中に、言わばタイム・カプセルの中に保存されているかのごとくに残存しており、資本主義的生産がもたらす諸々の効果を通して「最近代的な形態」へと転化しようということである。マルクスは「私的所有の要素が集团的要素に打ち勝つか、それとも後者が前者に打ち勝つか」(19: 391 頁)という第一草稿で述べられる試練を、共同性の「最近代的な」形態に向けて克服しえたならば、ロシアは「共産主義的所有の形態」への革命を成し遂げられるだろうと考えたと言っている。

だがこれは理論的可能性以上のことではない。慎重なマルクスは、実際にザスーリチに送った手紙では未来に関する具体的・明示的・肯定的言及を周到に避け、この共同体が「ロシアにおける社会的再生の拠点」として機能するには、これを脅かす諸々の作用を除去し、その自然成長を促す諸条件の確保が必要だろうと述べるに留めており、今後ロシアが資本主義的生産の(西ヨーロッパとは異なる)もう一つの形態を展開するかもしれないという危惧を窺わせる(19: 239 頁)。資本制が世界を——各地の地政学的諸条件に応じて変形・分岐するかたちで——席卷している今日から見て、マルクスはロシア、ひいては世界の未来について両義的な思いを抱いていたと想像される。そもそも各地諸共同体の構成を比較し、或る型の複雑な変形・分岐として分析するという世界史的視座そのものが、資本主義的生産の傾向的法則の浸透によって、事後的・遡及的に成立したものであった<sup>4</sup>。ヘーゲルの思考の批判的検討から自分の仕事を開始したマルクス自身、そのことを自覚していた<sup>5</sup>。また古代共同体が非-資本主義的要素であると言っても、タイム・カプセルを不用意に解凍するなら、それが資本主義の体制の中で商品と化す危険も見逃せない。課題は山積している。

## 2. 資本制のループと過去への前進

しかしながら、理論的可能性以上ではないにせよ、資本主義の傾向に鑑みて、漠然とではあれ何がしかの理念的指針をつかんでいなければ、変革への意志もまた痩せほそってゆくほかない。そこで本節では三つの草稿をも含めた「ザスーリチ書簡」への参照のみではその内実が若干、不明瞭であった「所有」の非-資本主義的形態について、少しだけその理解を深めておきたい。そこから資本主義的所有形態を批判する展望が、多少なりとも開かれるだろう。

「ザスーリチ書簡」でマルクスが提起した資本主義的生産と(古代共同体という)非-資本主義的要素との緊張を孕んだ共存という視角は『経済学批判要綱』と称される 1857 年から翌年

- 
- 3 ジル・ドゥルーズとフェリックス・ガタリは、マルクスによる歴史の地層的把握を継承し、脱地層化の運動としての政治を構想した。Cf. David Lapoujade, *Deleuze, les mouvements aberrants*, Paris, Les Éditions de Minuit, 2014.
  - 4 資本主義の傾向的法則の現状を、現代哲学およびいわゆる〈現代思想〉との連関で研究した成果として、本稿前註に挙げた文献以外に、例えば Étienne Balibar, *La philosophie de Marx*, Paris, Éditions La Découverte, 1993 ; Juliàn Ferreyra, *L'ontologie du capitalisme chez Gilles Deleuze*, Paris, Éditions L'Harmattan, 2010 ; Frederic Jameson, *Representing Capital : A reading of volume one*, London/New York, Verso, 2011. などがある。近年の成果に、長原豊『ヤサグレたちの街頭——瑕疵存在の政治経済学批判 序説』航思社、2015 年がある。
  - 5 この点については、松本潤一郎「上向と翻訳——言葉の身体化」『立教大学ランゲージセンター紀要』第 33 号所収、2015 年、35-50 頁を参照。

にかけて書かれた膨大なノート——後に『資本論』に結実する——の中に、とりわけ「資本主義的生産に先行する諸形態」（以下「諸形態」）と題された論考において、すでに見てとれる<sup>6</sup>。同論考は資本主義がどのように成立したかを考えるうえで示唆に富む。周知のように、資本主義の出現をどう考えるのか、それはどの地域でも成り立ちうるのかという問いは、マルクスに触発された歴史学者や経済学者、哲学者たちのあいだで大いに議論を引き起こした<sup>7</sup>。その点も踏まえつつ、同論考を先述した視角から一瞥してみたい。なお、ロシア共同体へのマルクスの関心は多分にザスーリチの問いに触発されたものであり、「ザスーリチ書簡」執筆に約四半世紀先立つ「諸形態」はロシアをじかに扱ってはいない。焦点は西ヨーロッパにおける資本主義的生産以前・以後の所有形態の比較に定められている。しかしながらそうであるだけにいっそう、資本主義的生産の只中に非-資本主義的要素を探りあてるとして同論考は示唆的である<sup>8</sup>。これも同論考をとりあげる所以である。

本稿に係わる限りで「諸形態」における論点を、次節で試みるクロソフスキーの議論との連接を念頭におきながら、マルクスの言葉にできるだけ寄り添いつつまとめてみよう。古代共同体において財（富）は生産の目的ではなかった（「諸形態」137頁）。所有とは「自分の自然的生産諸条件にたいして、いわば延長された自分の身体をなすにすぎない自分自身の自然的諸前提にたいする様態に関わること」（「諸形態」144頁、傍点原文、以下同）だからである。言いかえれば諸々の身体（その集合が「部族」または「共同体」と呼ばれる）とその身体をとりまく環境——そこから身体は生産の素材と手段を汲みとる——は一体化しており、それゆえ所有とは、「なんらかの部族（共同体組織）に所属すること（これのなかで主体的・客体的存在をもつこと）を意味」するからである（「諸形態」145頁）。そこでは所有は共同体がみずからを再生産するための諸条件と密接している（「諸形態」149頁）。なお言語もこの意味での所有の一つであり、所有とは個人の或る共同体への所属を媒介する形態である（「諸形態」141頁）。これが生産手段と生産者が分離していない所有形態である。

（この意味での所有形態は定住民族以外にも見いだされる。この場合、大地との連関に焦点が当てられる。具体例としてマルクスはアジアのステップや高原における遊牧民族の所有形態、またアメリカ先住民の狩猟地との連関を挙げている。彼らにとって「大地は、その他の自然条件と同様に、無限の大自然として現われるのであって」「彼らは大地にたいして、自己の所有物にたいする様態に関わる、——ただし彼らはこの所有をけっして固定しないのではあるが」（「諸形態」142頁）<sup>9</sup>。つまりマルクスがここで考察している所有は定住／遊牧といった区分を前提とせず、むしろ双方を横断する性質をもつ。別の箇所では彼は、「資本 Capital」は元々家畜を指しており、その意味では遊牧民が「最大の Capitalist〔資本家〕である」と述べている（「諸形態」

---

6 「資本主義的生産に先行する諸形態」の引用・参照は、カール・マルクス「一八五七—一八五八年の経済学草稿」『マルクス資本論草稿集②』資本論草稿集翻訳委員会訳、大月書店、1993年所収に依拠。以下「諸形態」と略記して該当頁数とともに本文内に表記。

7 日本では「日本資本主義論争」、西欧では「ブレナー論争」と称される論争が名高い。いずれも膨大な研究蓄積があるが、例えば前者については青木孝平『天皇制国家の透視——日本資本主義論争 1』、河西勝『世界農業問題の構造化——日本資本主義論争 2』いずれも社会評論社、1990年の整理が簡便である。近年の研究に桂秀実『天皇制の隠語』航思社、2014年がある。後者については Ellen Meiksins Wood, *The Origin of Capitalism*, New York, Monthly Review Press, 1999. が論争の的を得た説明と併せて刺戟的である。エドワード・P・トムソン『イングランド労働者階級の形成』市橋秀夫・芳賀健一訳、青弓社、2003年とロバート・ブレナー『所有と進歩——ブレナー論争』長原豊監訳、日本経済評論社、2013年も参照。

8 本稿執筆にあたり、エリック・ホブズボーム『共同体の経済構造——マルクス『資本制生産に先行する諸形態』の研究序説』市川泰治郎訳、未来社、新装復刊版2006年（初版1969年）が参考になった。

9 ドゥルーズは、この所有形態を「遊牧的配分」と呼ぶ。Cf. Lapoujade, *Deleuze*, op-cit., 58.



174 頁、〔 〕内訳者、以下同)。資本主義を批判するにあたり、遊牧的なるものを資本制に安易に対置し称揚する姿勢をすでにマルクスが掣肘している点に留意したい。)

富が生産の目的と化す体制が資本主義的生産のそれである。そこでは生産者と生産手段が切り離され、所有は言わば抽象化される。解明すべきは「歴史的過程の結果」としてのこの「賃労働と資本との関係においてはじめて完全なかたちで措定されるような分離」(「諸形態」140 頁)である。この分離は個人の共同体からの離脱を助長する。みずからの生存(生命の再生産)を共同体に媒介されて支えていた個人は今や、その支えを自分の生産手段ではなく、他の生産者の生産物に見いだすようになる。生存は生産物の交換を通して支えられる。「交換そのものが、こうした個別化の主要な一手段なのである。交換は、群棲的存在〔群棲体〕を不必要にし、それを解体する」(「諸形態」150 頁)。資本制においては「労働する個人が土地、大地にたいして、自分自身の土地、大地にたいする様態で関わる状態、すなわち、土地の所有者として労働、生産している状態が否定されているのである」(「諸形態」153 頁)。これは支配形態の変化でもある。共同体における支配とは異なり、資本制においては交換という媒介を経由した、「他人の意志の取得が支配関係の前提なのである。だから〔……〕その持ち主を支配者にすることはない」(「諸形態」156 頁)。資本制においては、共同体的「隷属諸関係〔Hörigkeitsverhältnisse〕の解体」(「諸形態」158 頁)と引き換えに等価交換そのものが「支配者」と化す<sup>10</sup>。そして前述した意味での所有の否定、言い換えれば労働者たちの「無所有性」を促進するのが、交換の媒体でありかつ資本へ転化するものとしての貨幣である(「諸形態」165-166 頁)。貨幣または貨幣財産のたんなる定在のみでは資本とは言えない(「諸形態」164 頁)。資本とは生産物の価値(いわゆる「使用価値」)ではなく、交換によって生じる価値(いわゆる「交換価値」)の蓄積だからであり、貨幣が資本に転化するには、使用価値の生産が優勢にある生産関係から、交換価値およびその生産の優勢への変化が、前提とされる(「諸形態」159 頁)。この前提に立つのみ、富(財産)は貨幣形態において現存することができる(「諸形態」162 頁)。「所有」は——生産手段から切り離されているという意味で——その定義を一新する。逆に言うと、生産手段が「まだ、生きた労働そのものと癒着していて、生きた労働の領域として現われる」状態では、資本へと転化しうるものとしての貨幣は、「本当の意味で流通することはないのである」(「諸形態」163 頁)。

このように資本とは、抽象化された所有形態に基づいて、生産の目的を富に定めた体制を作動させる過程であり、その作動を補助するのが貨幣である。貨幣はただそれのみで資本に転化可能なものではなく、生産者と生産手段の切り離しという歴史的過程を経てその機能を付与される。資本は局所的・具体的に時空を限られた定在ではなく(但しこれは、資本が非歴史的なものであるという意味ではない)、ここでは厳密に展開することはできないが——それには『資本論』第一巻に加え第二巻と第三巻をも読解する必要がある——、生産と交換と消費と分配が複雑に連関した循環運動、これらの要素すべてを寄せ集めて結合させ、「現実の蓄積〔Anhäufen〕」(「諸形態」167 頁)を行う支配の機能であり、またこの過程それ自体でもあって、貨幣はその重要な一時的停留所である。所有や富もまた、この関係の中において規定されている限りでのみ意味をもち、機能する。別の組み合わせに置かれるならば、それらは同じ要素でありながら、資本に敵対する体制を構成する可能性がある。「同一の物象〔Sache〕が、あるときは資本の規定のもとに包摂されており、あるときはなにかほかの、しかも資本に対立する規定のもとに包摂されうるものであり、それに従って、資本であつたり、なかつたりするのである。資本とは、

10 Cf. Moishe Postone, *Time, Labor and Social Domination: A Reinterpretation of Marx's Critical Theory*, New York and Cambridge: Cambridge University Press, 1993. 榎原均『「資本論」の核心』情況出版、2014 年も参照。

このように、明らかに一つの関係であり、しかも一つの生産関係でしかありえないのである」（「諸形態」176頁）。富の資本主義的生産を目的とした循環の外に出るなら、資本は非-資本となる。運動が停止するとき、資本も富も財も貨幣も所有（権）も、今日それらが用いられている際の意味を失う可能性がある。マルクスは、この運動が円環を描く様子を次のように表現する。「これまで見てきたように、貨幣の資本への転化は、労働者にたいして労働の客体的諸条件を引き離し自立化させた歴史的過程を前提するが、他方で、すべての生産を資本に従属させ、いたるところで労働と所有との分離を、労働と客体的諸条件との分離を発展させ、貫徹させるものは、ひとたび成立した資本とその過程とがもたらす効果〔Effect〕である」（「諸形態」173頁）。分離を前提としてみずからを産出しながらも、この分離を結果effectとして産出する。このループ状の運動が、資本主義的生産の円環たる所以である。資本主義の〈起源〉が歴史上・地理上のいたるところに見いだされるかのごとき感覚を私たちにもたらすのもこのループである。資本主義は不滅であり普遍的であるという錯覚によって、私たちが資本制の中に閉じ込められる罠である。この循環において、目的化した富の生産は或る意味では何も生産しておらず、無目的である。「この歴史的過程は、これまで結合していた要素の分離であった。だからこの過程の結果は、これらの要素のうちの一つが消滅するというのではなくて、それらのいずれもが〔……〕他のものにたいして否定的に連関するというかたちで現われる、ということである。自由な労働者に転化させられた階級の側からの客体的諸条件の切り離しは、同時にまた、その対極でのこの同じ諸条件の自立化として現われざるをえないのである」（「諸形態」160頁）。労働者にとっての所有と労働との分離は、資本家にとっては所有の自立化として現われる。その意味で両者は非対称的である。言いかえれば、資本制における「この交換および交換価値の発展が、一方では、自己の存在諸条件にたいする労働の所有諸関係の解体をもたらすとともに、それ自体が生産の客体的諸条件のなかに組み入れられていた労働の解体をもたらすのだ、ということである。〔……〕交換価値にもとづく生産とこの交換価値の交換にもとづく共同体組織とは、労働の客体的諸条件の分離を前提し、またそれを生産する」（「諸関係」168頁）。

この「共同体組織」すなわち資本制においては、所有が労働の成果であるかに見えても、それは外見上のことでしかない。この等価交換システムは何も生産しておらず、労働と所有は分離し続け、非対称化が進んでゆく。「このように等価物の交換が行われるのは、交換なしに、しかし交換の外観のもとで他人の労働を取得することに基礎をおく生産の表層にすぎない。〔……〕だから、交換価値の体制——労働によって量られる諸等価物の交換——が、転変して、というよりはむしろ、その隠された背景として、交換なしでの他人労働の取得、労働と所有の完全な分離を顕わすことを、もはや驚くにはあたらない。〔……〕労働がふたたび、自己の客体的諸条件にたいして、自己の所有物にたいする状態で関わるためには、〔……〕交換なしでの生きた労働の取得を措定する私的交換の体制に代わって、それとは別の一体制が登場しなければならないのである」（「諸形態」169頁、ルビは訳者）。

このように交換価値は、労働に支えられながらも労働から離脱してゆき、労働を要さずともそれ自体の力で価値を産出しうるかのごとき様相を呈する。交換（という外観）なくして価値は実現されない。そして交換の背後に、所有から切り離された労働は、埋もれてゆく。等価交換という対称性の外見の下で、労働と所有の非対称性が、その度合を深めてゆく。

私たちは、このような目的／無目的の体制「とは別の一体制」に、移行できるだろうか。システムの深部、むしろ外部に沈んでゆく労働を、目的／無目的あるいは価値／無価値のいずれにも還元することなく、生産と交換の双方を斜めに過ぎりつつ、資本制的所有形態を経由した後の非-資本制的所有形態において、捉えなおすことができるだろうか。資本制に先行する所有形態についての考察の途上で書きつけられた、人間にとっての真の〈富〉に関するマルクスの

次の言葉は、この点を考えるうえで示唆的である。

富は、先行の歴史的発展以外にはなにも前提しないで、人間の創造的諸素質を絶対的に表出すること〔Herausarbeiten〕でなくてなんであろう？ そしてこの歴史的発展は、発展のこのような総体性を、すなわち、既存の尺度では測れないような、あらゆる人間的諸力そのものの発展の総体性を、その自己目的にしているのではないのか？ そこでは人間は、自分をなんらかの規定性において再生産するのではなく、生成の絶対的運動の渦中にあるのではないのか？（「諸形態」138頁）。

資本制における富の生産は、非対称化（そして非対象化）された労働を、すなわち既存の価値基準では決して捉えられないがゆえに言わば〈負の労働〉とでも呼ぶうる生産を、その裏面につねに随伴させている。資本制において蓄積されながらも、資本制によっては評定されえないこの未踏の〈富〉が、資本制を離脱するための、私たちにとっての理念的指針となるだろう。

以上、所有形態の変遷を考察してゆく過程でマルクスが突きとめた、資本制の円環における無目的性を、ピエール・クロソウスキー（1905-2001）は、『生きた貨幣』（1970）で、〈倒錯 perversion〉という視点から把握する<sup>11</sup>。以下、その理路を追っていこう。

### 3. ワープとしての倒錯——未来への逆進

クロソウスキーにとって倒錯とは、人間がみずからを再生産する円環（最も広い意味でのエコノミー）からの錯時的逸脱を指す。人間に見られる諸々の倒錯的なふるまいは、人間と人間以外の生命体のあいだで揺動する欲動 pulsions であるとともに、この揺動の解釈としての表現である。そこにおいて欲動は、類としての人間がみずからを再生産するという目的に従う生殖行為と、この目的に先立つ（精確にはこの目的が定める目的／無目的という分割そのものに先行する）性的欲動とにいったん分解されたうえで、あらためて人間各個体の統一性において（精確にはこの統一性を構成しながら）、再生産／倒錯という一見対立する二つの性向の混合として、出現する。

なぜ欲動はセクシュアリティにおいて、いったん分解されたうえで統一されるという迂回路を経るのだろうか。一見したところ無目的な性的快楽への個体の忘我・没入は、実は類としての人間の再生産という目的に従って為される、生殖のいとなみだからであるとクロソウスキーは考える。その限りで快楽は再生産のための囹であり、快楽の擬装 simulation である。快楽と再生産は、同じものの表と裏である。現代産業社会（マルクスが考察した産業資本主義体制）において、快楽／再生産という表裏一体は、副次的上部構造／経済的下部構造の表裏一体として現われ、欲動の諸力は両者を横断しつつ両者を構成する。言いかえれば、欲動は己への抑圧をみずからつくりだしつつ、これを再び破壊する。クロソウスキーは次のように述べる。

欲動の諸力が経済 économie において、つまるところ私たちの産業社会においてみずからを表現するその仕方は、これらの力が支配的諸制度の組成 économie において取り扱われるその仕方に対応する。アルファにしてオメガであるこの下部構造が、既在する副次的諸

11 Pierre Klossowski, *La monnaie vivante ; précédée d'une lettre de Michel Foucault à Pierre Klossowski sur La monnaie vivante* (hiver 1970), Paris: Éditions Joëlle Losfeld, 1994. 以下、同書からの引用・参照は MV と略記し、該当頁数とともに本文内に表記。強調はいずれも原文。〔 〕内は引用者による補綴。



構造に対するみずからの反応によってその都度規定されるものであることは否定できない。だが眼前に現れている諸力は、下部諸構造から副次的諸構造にいたるまで同じ戦いを続けている諸力である。だから、これらの力が先ずは経済的諸規範にしたがって特種な仕方のみずからを表現するとしても、諸力は己自身に対する抑圧をみずから創造し、また己が様々な度合で被る抑圧を破棄する手段をも創造する。(MV, 14-15)

社会体を構成する、抑圧とその解除という二つの性向は、既述したように、個体においては快楽／再生産の緊張として現われる。個における両者の巧妙な均衡（分解を経ての統一）によって、人類はみずからを維持し続けてきた。この均衡が崩れたとき、倒錯（者）が出現する。倒錯は、再生産という人類史総体に先立つ前史への固着として、現在時において錯時的に出現し、再生産の円環を攪乱する。サドの倒錯論をふまえつつ、クロソウスキーは次のように述べる。

この二つの性向の取り違えによって、自己再生産能力を備えた個体の統一性は基礎づけられる。そしてこの二つの性向は、個体が有機的生体として完成した後もなお継続的に分離されると、個体固有の生命機能を危険に曝す。だから倒錯という言葉は、生殖活動に先在する段階への情欲の固着を指し示すにすぎないが、相互に組み合わされて複雑な諸情念を形成する単純な諸情念という、サド的な意味での単純な諸情念という語は、多様な策略を指し示す。この策略によって元初の情欲は、その解釈能力を通して有機的生体の多様な機能の中から興奮をもたらす感覚の新たな諸対象を選びだす。その目的は、感覚の新たな諸対象を唯一なる生殖機能の代わりに据え、この置き換えによって生殖機能をはてしなく宙吊りにし続けることである。これらの置き換えや策略は、繁殖本能に対して行使される力の天引き以外のなんだろうか。天引きされた欲動の力は、それゆえ一つの幻想の質料〔素材〕を形成し、この質料〔素材〕を情欲が解釈する。そして幻想はここで、製造された対象物の役割を担う。欲動の力による幻想の使用がその価格を、この使用と一体化する情欲に与える。そして倒錯の場合には、情欲を引き起こす幻想の使用は、その幻想がまさしく交換不可能であることを欲する。ここには感覚された情欲への最初の価値づけが介入している。群居に適った個体的統一性の完成を、すなわち個体の生殖機能を拒絶するがゆえに私たちが倒錯的と述べた一つの衝動〔内化した欲動 *impulsion*〕は、その強度を通して、交換不可能な、それゆえ価格外・法外な価格のものとして、みずからを提示する。(MV, 17-19)

倒錯（者）による円環の攪乱は、再生産の停止を目的として、「繁殖本能に対して行使される力〔を〕天引き」する。この「天引き」された欲動が、倒錯（者）特有の幻想の素材となる。この幻想は、人類（「群居」）の再生産といういとなみから逸脱しているがゆえに、倒錯者と「群居に適った」他の諸個体とのあいだに交流は成り立たないかに見える。少なくとも資本制下の交換の仕組みでは、その幻想を評価することはできない。倒錯者が己の抱く幻想の「交換不可能〔性〕を欲する」とは、このことを指している。

マルクスが「先行する諸形態」で考察したように、資本主義下における交換は、共同体を解体し、「群棲的存在」としての人間を、諸個人に分解する。逆説的にも、倒錯者が己の幻想の交換不可能性を欲するほどにまで個体化を推し進めうるのは、現代産業社会を支配する、私有権に基づいて行われる諸個人間の交換行為に拠っている。この視点からすれば、資本主義は目的と無目的の相違、再生産と純然たる蕩尽の差異が、最も識別不可能化する体制である。そこでは目的と無目的は互いを擬装し合い、互いが互いの分身となる。クロソウスキーが言うように、



資本制は、己を抑圧しては解放する欲動によって駆動する<sup>12</sup>。生存を目的とするエコノミーと過剰な濫費とが、互いの擬態 *simulacre* となる様相を、彼は次のように描きだす。

諸々の衝動〔内化した諸欲動 *impulsions*〕が、本来なら道具として利用されるものを悉く無差別にみずからに奉仕させるのだとすれば、諸対象物が何の擬装であるかを識別するには、諸対象物というこの範疇を考察すればよい。つまり、その本性上、擬態から最も遠い〔はずの〕道具類は、効率性のみを目的として厳密に制限された〔それら道具類の〕使用法を指示するという点で（すなわち、その諸効果—結果において不可逆的な一つの操作を——たとえその操作がどれほど複雑に分岐可能であったとしても、〔その操作を用いて為される〕模擬実験から得られるあらゆる〔実験〕結果を排除しつつ——規定するという点で）、非—擬装の、したがって実現された事実〔既成事実〕の擬態となるだろう。この既成事実によって、情念的生の中から、このようにして使用物の製造という目的へと方向転換を余儀なくされる〔迂回させられる〕部分が天引きされる。ところで芸術における擬態が諸情念の用いる道具の一つであるとすれば、その擬態もまた、まさしく効率的操作の一つたらざるをえない。それが一つの擬装された擬態にすぎないなら、この擬態は己の〔もたらしべき〕効果を欠落させていることになる。擬態の効果とはまさに、みずからの行使する操作においてつねに可逆的で、情念的生と同じく拡張された可変的な使用法に存するというのに。（MV, 48-49）

資本主義的生産が進展した産業社会では、効率性の増大に向けて、生産手段（「道具」）の生産およびそのための実験も大規模化する。先の引用に出てきた衝動の倒錯は、この「道具」を効率性とは逆の仕方を用いることで、再生産を「宙吊り」にする。そのとき、最大効用を目的とするはずの「道具」が、逆に効率性の擬態であることが明らかになる。他方、産業社会にあつては芸術——しばしば効率性に対立する純粋な贈与の領域と把握される傾向がある——においても、いっけん蕩尽と映る芸術作品が、逆に蕩尽を擬態するものであることがわかる。効率性／蕩尽という非対称性の裏面には、そのいずれをも横断する、可逆的な衝動が触知されるわけである。ここで非対称性に関して想起すべきは、マルクスが資本制における所有と労働のあいだの非対称性を洞察し、そこに、資本制を支えながらも資本制から排除される、負の労働を見ていた点である。そして資本としての富は、資本の円環の外では、価値をもたない。マルクスはこの事態を肯定的に捉え返し、資本制においては負としか評価されない労働がもたらし、あらゆる評価尺度を逸脱する〈富〉としての「生成の絶対的運動の渦中にある」「あらゆる人間的諸力そのものの発展の総体性」へと、資本としての富を反転させる可能性を示唆した。

そして、この負の労働または〈富〉を、クロソウスキーは「情念から使用物の製造という目的へと方向転換を余儀なくされる部分」の「天引き」として抽出してきたと言ってよい。この「天引き」を手がかりとして、クロソウスキーは、密室に閉じこもり、他者と断絶した怪物という、倒錯者についてのサド的イメージから離れ、共同体への従属から諸個人を解放した資本主義の力を基礎としつつ、あらためてこの諸個人による共同性の再生を構想したマルクスと同じく、倒錯者たちが各々に抱く幻想の交換・交流 *communication* の実現可能性を、探つてゆく<sup>13</sup>。次節で述べるが、この「交換」には、資本制下の所有形態を逸脱し、新たな規定の下に置かれ

12 ドゥルーズとガタリは、この仕組みを「一方で脱領土化したものを他方で再領土化する」「究極的には脱領土化と再領土化を区別することはできない」と表現した。Cf. Lapoujade, *Deleuze.*, op-cit., 165.

13 その際、クロソウスキーは、サドにフリーエを対置する議論を展開しているが、ここでは立ち入らない。

る可能性がある。倒錯（者）は、人類の前史に固着するという意味で太古的・錯時的でありつつ、資本主義的生産様式の浸透によって、現在へとワープ（回帰-再来）する可能性を手にもいる。クロソウスキーはサド的な倒錯者について、他者と断絶した倒錯者の身体は、逆に自己の所有権を放棄して、さらには他者に憑依される様相を呈するという。「自己の身体の所有権を他者のそれと同様に破棄すること、これが倒錯者の想像力に固有の操作である。彼は他者の身体に己のものであるかのごとくに棲みつき、それゆえ己の身体を他者に配分する。言いかえれば固有の身体なるものは幻想の領域として回復される。斯くて身体は幻想の等価物、幻想の擬態にすぎないものとなる」（MV, 57）。固有性-所有権という概念は、産業社会における倒錯者のふるまい（「操作」）によって、諸々の身体間の相互擬態という形態において、共同性を帯びたものに変質しうる成分を含んでいる。その意味でサドの倒錯（者）は、産業社会を支える価値評定の枠の臨界（交換不可能性の閾）を先駆的に示していると、クロソウスキーは考えたのである。だとすれば、この共同性の回復-再帰の可能性は、さしあたり奇抜な空想の域を出ないにせよ、私たちが資本制を離脱するための理念的指針の一つとして、検討と錬成の対象にもなりうるだろう。そしてクロソウスキーは、この身体間の相互擬態を、「生きた貨幣」という概念を提起しつつ、考察してゆく。

#### 4. 労働賃金とは別の仕方

しかしながら、衝動から「天引き」された部分をはっきりと局所化し、明確にここにあると同定することはできない。目的／無目的という対立を斥ける衝動の領域では、生産はただちに消費だからである（MV, 38）。貨幣の価値尺度が機能しない、あるいは尺度そのものが変化し続ける所以である。局所化不可能性によって価値評価の尺度を逸脱しながらも、しかし資本制または産業社会を支える〈力〉を捉えていたという点で、その思考対象がどれほどマルクスのそれには程遠いものに見えたとしても、クロソウスキーは、マルクスと同様、特異な労働価値説の立場を採っている。「特異な」と述べたのは、マルクスにとって労働が価値たりうるのは交換の局面、交換という契機を経た場合に限られるからである。言いかえれば、貨幣が介在しない限り成り立たない労働価値説であるという意味で、マルクスの立場は特異である<sup>14</sup>。同様に、クロソウスキーにおいても、交換という価値評定の枠——具体的には言語活動——が否定的にであれ機能しない限り、衝動の所在を触知することはできない（MV, 58-59）。これは、所有が共同体への個体の帰属を意味するとして、言語活動に関してもその側面を指摘したマルクスと同じ視角である。

そしてクロソウスキーは、この局所化不可能な、したがって価値標定の枠そのものを変化させる「生成の絶対的運動の渦中」にある力、資本制において蓄積されながらも資本制によっては評定されない、「あらゆる人間的諸力そのものの発展の総体性」としての「富」を、私たちが享受し、さらに豊かなものにしてゆく一助として、「生きた貨幣」の導入を提案する。このように彼はマルクスの思考の一面を継承したと言っていい<sup>15</sup>。

「生きた貨幣」は、所有と労働を切り離し、さらには所有の意味を変質させたうえで、労働者

14 したがって、マルクスの特異な労働価値説は、例えば貨幣を廃棄すれば労働の価値が正当に評価されるといった立場に与するものではない。同様に、本稿でとりあげるクロソウスキーの〈生きた貨幣〉——身体を貨幣にするという奇想——もまた、〈生きた労働〉を直截に表現するものではない点に注意されたい。

15 クロソウスキーとマルクスにおける共鳴については、すでに指摘がある。師玉真理「像の響応——フーコー／クロソウスキー」『現代思想』31（16）号、2003年、青土社所収。同論考なくして本稿は書かれなかった。

に労働の対価として支払われる資本制下の貨幣、括弧つきの「等価交換」を担う貨幣に対し、当の資本制における生産様式の発展を背景として、資本が切り離れた生産手段と労働者を、逆に再び結合させ、かつての所有形態（所有は個人における共同性の徴であった点を想起された）の更新された回復を担う貨幣、富の等価物でありかつその富そのものでもある貨幣を指す（MV, 75）。すでに述べたように、この貨幣は、互いを擬態し合う諸々の身体である。局所化不可能な衝動を、局所化不可能なままに担い、価値評価の枠組そのものの転換を行ない、所有と労働を再び結合することができるのは私たち各々の身体においてのみだからである<sup>16</sup>。

しかしながら、身体が貨幣となる世界は、未だ空想の域を出ていない。クロソフスキー自身従来の貨幣によっては支払も価値評価も不可能な、諸衝動における「天引きされた部分」を諸個人の身体によって支払うことが可能となるユートピアの実現には、まずは人びとの生活水準へのきわめて高い保証が前提とされ（MV, 68）、そもそもこれは「一見したところ不可能な退行 *une régression apparemment impossible*」の想像にすぎないと断っている（MV, 67）。また、身体を貨幣にするという奇想が、かつての奴隷制と変わらぬものに陥りかねない危険にも、彼は自覚的である（MV, 69）。サド的倒錯（者）が、他者の身体への暴力行使を通して成立するものであった点に鑑みれば、やはり「生きた貨幣」には検討の余地が多分にあり、安易な称揚は許されない。私たちとしては、この奇怪な想像力が、産業社会の進展に伴い続ける「退行」または「倒錯」として、タイム・カプセルのごとくに現在へと浮上、あるいはワープしてくる点に、資本制の臨界を見通す展望を開く、ごくささやかな可能性が含まれていることを、さしあたり確認するに留めるほかない。私たちにはいまだ、資本制「とは別の一体制」を構想する思考も、表現する言葉も、そしてその経験も乏しい以上、それは致し方のないところである。その意味で、生活あるいは生産様式が、私たちの思考を或ていど規定するというマルクスの洞察は、様々な留保がつけられてきたにせよ、依然、正しいと言わざるをえない。

その点をふまえつつ、資本主義的生産の体制下で、マルクス的に言うならば所有と労働を切り離されて生きる私たちのいとなみを、クロソフスキー的に述べるならそこで「天引き」された欲動を、労働賃金「とは別の」仕方、私たち自身が、何とかして正当に評価——否、価値尺度そのものの生成変化が問われている以上、むしろ〈翻訳〉<sup>17</sup>——する術を模索するクロソフスキーとマルクスの試みは、今なお切実であると言ってよいだろう。

以下に引くクロソフスキーの問いかけは、「産業社会」が変化した今日も、そのアクチュアリティを失っていない。「道具的諸対象の製造（現代世界にその相貌を与える）は、経済的主体が己の個体的統一性、つまり己を生産しかつ再生産する能力から出発して、自分の欲動の状態の等価物（芸術的擬態のような）を欠くがゆえに、労働賃金とは別の或る等価物を用いて、みずからの生存のためにその〔欲動の〕状態の放棄を宣言するということだけでも示しうるだろうか。ただ生存するためだけに、主体は〔道具的諸対象を〕製造するのだろうか。それとも放棄された欲動ないしこの欲動を表現する能力は、道具的諸対象の製造行為を通じて、道具的諸対象が命じる使用を利するために〔欲動が〕被る損失の価値が明らかになることを要求するのだろうか」（MV, 46）。資本制が〈負の労働〉または〈衝動の天引き〉と引き換えに可能にした生産の飛躍を背景にして、産業社会の中に錯時的に出現した倒錯（者）のふるまいを手がかりに、「太古」共同性の更新と復活を目指す一環として、「労働賃金とは別の或る等価物」の実現が、

16 貨幣-擬態としての身体の流通については、松本潤一郎「ピエール・クロソフスキーにおける身体と交換——『欲待の掟』を中心として」北海道大学大学院文学研究科映像・表現文化論講座編『層——映像と表現』第7号、2014年、ゆまに書房所収を参照されたい。

17 この点についても、前掲拙稿「上向と翻訳——言葉の身体化」を参照。



〈生きた貨幣〉という概念を通し、クロソフスキーによって提起された。マルクスが「ザスーリチ書簡」草稿に書きつけたように、この実現可能性は、「私的所有の要素が集团的要素に打ち勝つか、それとも後者が前者に打ち勝つか」という試練と切り離せない（なお、ここで言われる「集团的」と「私的」のいずれも、数的な多い／少ないを意味するものではない点に注意されたい）<sup>18</sup>。

また、これに加えて、敢えて言うなら労働力〈供給源〉であった農業人口の、いわゆる先進諸国における減少——その主要因は他ならぬ資本主義的生産の浸透にある——をも考慮する必要がある。人類史において、これまで主に土地との連関——定住的であれ、遊牧的であれ——において育まれてきた、所有と共同性との身体における結合の感覚を、生まれながらにしてすでもたずして育った人びとが増えつつあるかに見える現状において、この試練は、困難の度合をさらに高めているように思われる<sup>19</sup>。所有と共同性との身体における連結を、今日、私たちはいかにして育んでゆくのだろうか。資本制「とは別の一体制」を構想する思考、表現する言葉、そしてその経験を、未だ持ち合わせていない私たちには、手探りでこの困難に取り組んでゆくほかない。「所有」「共同性」「身体」といった概念が、従来と同じ意味をもっているかどうか、労働力〈供給源〉の枯渇と矛盾を来たすことなく並走する、常態化した失業——それ自体が搾取の形態と化しているかにすら見える——に取り巻かれた今日、もはや自明ではないからである。課題は山積しているが、冒頭に引いたバージャーに示唆を受けつつ、本稿を閉じた。

---

18 「労働賃金とは別の或る等価物」の、「私的所有の要素」を優位に置いた実現に向けて、すでにブルジョワジーは動いている。「余剰労働賃金 *sursalaire*」「余剰時間 *surtemps*」概念を用いてこの動向を分析した Jean-Claude Milner, *Le salaire de l'idéal ; la théorie des classes et de la culture au vingtième siècle*, Paris : Éditions du Seuil, 1997. を参照。20 世紀に入って賃金労働者化したブルジョワジーにおける、報酬形態の変遷が示されている。

19 労働力供給源の危機および後に触れる失業の搾取化について Jameson, *Representing Capital*, op-cit., and Aaron Benanav, 'Misery and Debt: On the Logic and History of Surplus Populations and Surplus Capital'. (<http://endnotes.org.uk/en/endnotes-misery-and-debt>) を参照。